

インタビューと文献調査から明らかにされる自然写真家の様々な取り組みに関する研究

北海道大学大学院 環境科学院

環境起学専攻 実践環境科学コース

大原 尚之

自然写真は、これまで私たちが知る機会のなかった様々な自然環境における新しい視点を提供し、その魅力を発信してきた（飯沢,2008）。高度経済成長後、自然への関心が高まる時代性とも合わさって、自然写真という言葉が一般的になり（竹村,1995）、自然環境に向けた関心・学習のきっかけとなる写真を撮影してきた自然写真家の取り組みは、現在も高い関心が寄せられている（關次,2007）。「自然写真」の守備範囲は天体から山岳まで幅広いが、本研究では特定のテーマ（生物や地域の自然）に絞って撮影し続ける自然写真家に焦点をあてた。「①自然環境をフィールドにする際、何を意識しているのか」、「②自然写真家の取り組みが、自然の魅力を伝える環境教育や環境保全との方面で、どのようなグループとの接点があるのか」、また「③自然写真で起きている諸問題・議論」について、自然写真家 16 人に対するインタビュー調査および、これまで自然写真家が発表されてきた自然写真集の文献調査を実施し、質的研究によるデータ分析を行った。

自然写真家には自然観察に基づき、自然科学を背景に踏まえたタイプがいる。生態図鑑を幾冊か所有しつつ、研究者の取り組みに関する報告書や、L・カーソンや星野道夫を代表する自然をテーマにした作品にも関心を持ち、自然の生態や現象を観察・分析し、自然科学的な背景を掴むことを強く意識している。加えて写真展や講演等で写真を発表する際、自然科学的な説明を添えている。自然写真家の方々は、客観性をもたせる為に自然科学を把握するのではなく、写真を通して表現したい或は伝えたいものを明確にしたいという意図から自然科学に関する知識や情報を抑え、図鑑や研究者との接点を築いてきた。

自然写真家は、自然番組や生態学・分類学の研究に対して協力している。また、地域のエコガイドを務め、地域独特の自然の魅力を伝えてきた。自然写真家がこれまで撮影してきた地元の自然環境や、特定の野生生物に詳しい、長く自然と接してきているというアドバンテージをもっていることが、上記の活動に繋がる要因である。このように、自然写真家は写真の発表以外にも、自然の魅力を発信する役割を果たしている。

自然写真家は、野生生物の餌付けや絶滅危惧種の生息情報に関して、「餌付けは昔と比べて、世間に受け入れられなくなった」「やらせは本来、野生生物にとって良くない」「絶滅危惧種の情報は信頼できる人に教える」と慎重な意見を述べていた。出版不況が原因で、自然写真家がこれまでのように写真集で発表する機会は減少し、多様な自然写真集が発表された 90 年代に比べて活躍が目されにくい状況にある。自然写真家の様々な取り組みが、自然の魅力を伝える上で、どのような活動とリンクしていくのか、今後も検証する必要がある。